

公共建築物の寿命

首都大学東京名誉教授

深尾精一

Seichi Fukao

ミュージアム・展示施設がまず候補になりそうである。それは、ミュージアムという種類の建築が、要求される機能が単純であることと無縁ではない。保存・修復の部門や、貴重品の受け入れ動線などはしっかりと計画する必要があるが、一般的な展示施設への転用は容易である。

用途を前提とした現代建築

それに対し、二十世紀後半に建設された公共建築物のストックの多くは、まず用途・機能が綿密に計画され、それに最適に対応するように設計されている。建築基準法もまた、新築時の用途ごとにそのあり方が規定されており、フロアをコントロールする仕組みになっている。建築基準法が建築ストックの活用の障害となっているという指摘は、最近とみに耳にするようになった。

建築物の用途ごとに構築された「建築計画学」も、その最適化の手法の研究であったといってもよいであろう。ところが、同じ用途でも、建築物に要求される機能は、時代とともに変化している。最近話題となっている図書館は、筆者が学生時代に学んだ図書館とは様変わりしている。印刷された書籍そのものの意味も変化しているから、社会の変化とともに様変

公共建築物の長寿命化

公共建築物の長寿命化も、昨今の話題の一つである。地球環境・資源問題から、スクラップアンドビルドは止めるべきだという気運が高まってきたのであるが、その背景には、地方自治体等の財政が逼迫し、新しい施設に建替える余裕はなく、手を入れて長く使わざるをえなくなっているということがある。

また、いわゆる新耐震設計法（一九八一年）が施行されてから既に三四年が経っており、鉄筋コンクリート造の耐久性に関する技術開発も進んだ結果、建築物の物理的な寿命は飛躍的に高まっている。高度成長期以降に建設してきた、いわゆる箱物について、もう、建替えは望めないという時代になったのである。

しかし、ともかく長持ちさせればよいということではないであろう。一口に公共建築物といっても、その実態は様々である。

また、石造・煉瓦造という、物理的耐久性の高い建築物で都市を造ってきた歴史をもつヨーロッパと、二十世紀以降の鉄筋コンクリート造を活用して、それまでとは全く異なる公共建築物を造り始めた日本とは、長寿命化を考える背景が異なっている。

わりするのは当然であろう。とすると、建設時に最適化を目指すことよりも、要求の変化に対応できることが必要である。ただそれは、可動間仕切りなどを用いたフレキシビリティの高い建築を目指すべきだということではない。そのような計画は、過大投資になりがちである。それよりも、最近流行りの言葉で言えば、リノベーションしやすしい建築を目指すべきなのである。少し専門的に言えば、「スケルトン・キャパシティ」の大きな建築が望ましいのである。別の言い方をすれば、建築にはある程度の「冗長性」が必要だということになる。

コンバージョンによる長寿命化

公共施設のみを対象としたものではないが、BELCA賞という既存建築物に対する表彰制度がある。今年で二五年目を迎え、建築の表彰度として定着しつつある。これには、ロングライフ部門とベストライフフォーム部門とがあるが、最近ではベストリフォーム部門が多くなると同時に、両者の区分がはっきりとしなくなってきた。すなわち、長期に維持管理されている建築でも、何らかの手が加えられていることが多い、長年使い続けてきた建築を大胆にリノベーションする事例が増えてきているのである。

鉄筋コンクリートや鋼構造を主体とした、いわゆるモダンアーキテクチャーをどのように長持ちさせて扱うか、これは、日本が世界をリードするくらいの気持ちで取り組まなくてはならない、複雑な課題である。

長寿命なミュージアム建築

ミュージアム建築には長寿命なものが多い。博物館など、貴重な歴史的物品を保存・展示する施設であるから、建設時にも力を入れて造られたものが多い。立地も経済活動の影響を受けにくい場所が選定されることが多いので、結果として長持ちしているであろう。プラド美術館（スペイン）は博物館として設計されたものを美術館として使っているそうであるが、エルミタージュ美術館（ロシア）などはもとと王宮である。そして、ルーブル美術館・オルセー美術館なども、ミュージアムではない建築を転用したものである。いわゆるコンバージョンであり、特に一九八六年の駅舎を大胆にリノベーションしたオルセー美術館の出現は、衝撃的なものであった。その後は、日本でも、歴史的建造物をミュージアムにコンバージョンする事例は枚挙に暇が無い。

文化的な価値がある建築を活用するには、

そして、その中には、驚くような用途変更が行われている事例が少なくない。

今年表彰された事例には、流れる滑り台の付いた公共の室内温水プールを、滑り台の踊り場を活かしたまま図書館にコンバージョンするというものがあった（山形県中山町立図書館「ほんわ館」）。図書館の概念が変わっていかなかったら、発想さえされなかった事例であろう。

そのような中で、学校建築はRC造の柱梁構造のものが多く、階高が高いため、スケルトンとしてのキャパシティがあり、若年人口の減少と統廃合によって発生した空き校舎を他用途に転用する事例も散見される。しかし、そのほとんどのものが、「建築」としての魅力を残すためのもとはなっていない。昔は地域のシンボルとして、長持ちするような建築として造られたのが学校である。ところが、現在の鉄筋コンクリートの学校建築は、そのほとんどが長く使いたいと思われような愛される建築とは言いがたい。そのような建築物のキャパシティが高いということは、二十世紀後半の建築の造り方の、どこが狂っていたのであろうか。

根継をしてでも残したい、そう思わせるような建築にしていくことが、気持ちの良い街並みをつくっていくうえでも必要なはずである。